〔千葉医学　90：260，2014〕

〔編集後記〕

今年最後の千葉医学雑誌をお届けいたします。気づいてみれば，平成26年も終わりですね。時間がたつのは本当に早いものです。

本号では，いつものように症例報告，留学記，エッセイ，雑報などが掲載されております。

附属病院薬剤部の築地先生からの症例報告を拝読しました。附属病院の内規では散剤の１包量について量が少ない場合，乳糖を加え0.3gにすることになっているとは無学ゆえ知りませんでした。小児への投薬や経管投与の際は，薬の量が少ないことが求められるため，１包量を0.2gに減量しても問題ないか検討されたことが報告されております。沼津市立病院の會田先生からの症例報告は，乳癌の事例について，術前に乳房内リンパ節転移の診断が困難であった事例についての報告です。乳房内リンパ節転移は予後不良因子とされていることもあり，慎重な評価が求められているとのことでした。

整形外科の村松先生と岡本先生からはそれぞれカリフォルニア州サンディエゴのScripps研究所とミネソタ州ロチェスターのメイヨークリニックに留学されている現況について報告されております。溌剌と奮闘されている様子がうかがえます。

ゲッティンゲン大学の髙野教授のエッセイでは，STAP細胞問題に触れつつ，研究に直接関与したもののみが論文の共著者として掲載される旨のご意見が書かれております。ご尤もだと思います。

千葉県がんセンターの関根先生の書かれた雑報では，論文査読者としてのご経験に触れつつ，論文をどう読み，どう書くべきかについて，批判的考察を持つことの必要性を説かれております。

第６回千葉医学会賞は肝細胞癌の発症に関する研究で千葉哲博先生が受賞されております。おめでとうございます。その他，本号には千葉医学会例会としての歯科口腔外科例会，小児外科学例会，呼吸器病態外科例会についての報告が掲載されております。

このように，本号も皆様のおかげで無事刊行できたことを感謝申し上げます。今後も千葉医学雑誌へご支援いただければ幸いです。

さて，髙野先生のお話に関連することですが，STAP細胞問題は，私たち大学教員にもかなりの影響を与えております。千葉大学では各教員は今後，学位論文審査を行う前に，審査を受ける論文について剽窃チェックツールなるパソコンソフトを使用し，剽窃の有無を検査しなければならないこととなりました。個人的には研究は真理を解き明かすことを喜びに思いつつ楽しくやりたいなと考えておりますが，いつの日からか生計を立てたり立身出世をするためにうそをついてまで論文を書く方が現れ，そのような方がメディアを騒がせるような時代になってしまったようです。各研究者がしっかりした倫理観を持つべきですし，その点の教育を強化することが言われておりますが，そのようなことだけでは根本的な解決にならないように思います。研究者が豊かな心を持って研究できるような環境づくりが必要ですし，そのための制度改革をしなければ，何も変わっていかないような気がしております。

（編集委員　岩瀬博太郎）